

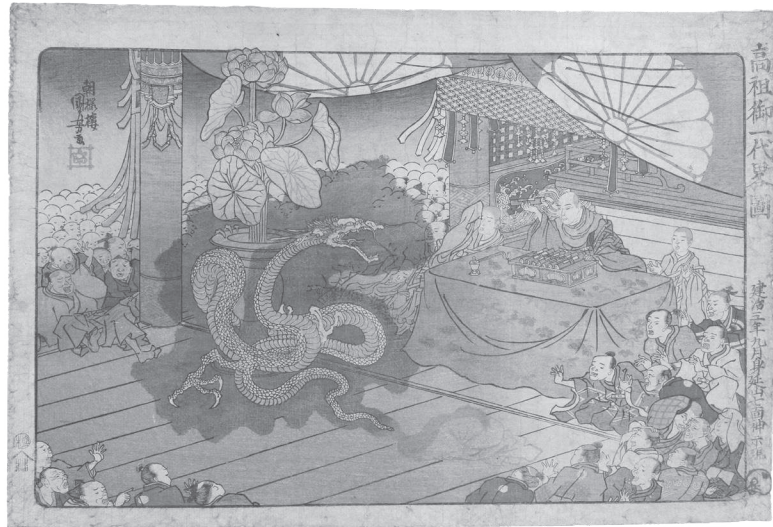
如是我聞

Vol.31



仏教系大学会議

〈表紙〉 建治三年九月身延山七面神示現（高祖御一代略図の内）



資料名：建治三年九月身延山七面神示現（高祖御一代略図の内）

作画：歌川国芳

版元：〔江戸〕〔伊勢屋利兵衛〕

製作年代：〔天保7年（1836）頃〕刊

形態等：1種2枚 上図25.6×38.0cm、下図25.1×37.1cm

所蔵者：立正大学図書館（古書資料館）

「高祖御一代略図」は日蓮の有名な逸話を題材とした10枚揃いの錦絵である。作画は日蓮宗の信徒でもあった歌川国芳（1797-1861）、版元は伊勢屋利兵衛による。戦前からその人気は高く、多数の複製版が作られた。

当館では、以下の4種を所蔵している。日蓮が祈祷によって雨を降らせた「文永八鎌倉霊山ヶ崎雨祈」、処刑直前に奇跡が起こって難を免れた「相州竜之口御難」、配流先の佐渡へ向かう途中に題目の功德で嵐を鎮めた「佐州流刑角田波題目」、日蓮の説法を聞きに来ていた身延山の七面天女が龍の姿を現した「建治三年九月身延山七面神示現」。このうち、掲載図の「身延山七面神示現」については2点を所蔵している。両者は同版だと考えられるが、色合いや龍の周囲にたちこめる靄の刷り方などに違いが見られる。また下図には、上図に見られる左端の極印と版元印が欠けている。一見ただけでは気づきにくいだが、両図を比較すると、下図の左端が補修されていることが分かる。

（立正大学 古書資料館専門員 小此木敏明）

令和6年度 第31回仏教系大学会議日程表

10月3日（木） 会場：立正大学

時間	内容	場所	備考
11:00～12:00	幹事校会・幹事校事務担当者打合せ（合同）	立正大学 11号館11階 第5会議室	幹事校学長（10校） 幹事校事務担当者
12:00～13:00	昼食（幹事校会参加者のみ）	立正大学 150周年記念館（13号館） 8階 コミュニティラウンジ	同上
12:30～13:00	総会受付		
13:00～14:00	総会	立正大学 11号館8階 第6会議室	加盟校代表者
13:30～14:15	研修会受付		
14:15～14:45	開会式 仏事（担当：立正大学） 代表幹事校挨拶 伊藤 真宏 氏（佛教大学学長） 担当校挨拶 山口 光治 氏（淑徳大学学長） 会場校挨拶 寺尾 英智 氏（立正大学学長）	立正大学 150周年記念館（13号館） B1階 ロータスホール	司会：淑徳大学
14:45～14:55	休憩（講演会準備）		
14:55～16:05	基調講演 演題：今求められる質保証における学生参画をどう考え、実践するか 講師：山田 剛史 氏（関西大学 教育推進部副部長・教授）	立正大学 150周年記念館（13号館） B1階 ロータスホール	司会：淑徳大学 校正：淑徳大学
16:15～16:30	記念写真撮影	正門 アショーカー・ピラー	雨天時 6号館1階
16:30～17:00	キャンパス見学		
17:00～17:30	懇親会場へ移動		徒歩移動
17:30～20:00	懇親会 開会挨拶 寺尾 英智 氏（立正大学学長） 乾杯 古屋 健 氏（立正大学副学長） 閉会挨拶 山口 光治 氏（淑徳大学学長）	ホテル ニューオータニイン 東京 3階「おとり」	司会：立正大学

10月4日（金） 会場：立正大学

時間	内容	場所	備考
9:30～10:10	事例報告Ⅰ 演題：京都文教大学「ともいきキャンパス」における質保証の取り組み 講師：河本 直樹 氏（京都文教大学 副学長〈教学・IR推進担当〉・大学教務部長・教育開発推進センター長）	立正大学 150周年記念館（13号館） B1階 ロータスホール	司会：淑徳大学 校正：龍谷大学
10:10～10:20	休憩		
10:20～11:00	事例報告Ⅱ 演題：教育の質保証に係る学生参画型の取組 —広島市立大学におけるカリキュラム・コンサルティングに注目して— 講師：山咲 博昭 氏（広島市立大学 教育基盤センター講師）	立正大学 150周年記念館（13号館） B1階 ロータスホール	司会：淑徳大学 校正：龍谷大学
11:05～11:20	閉会式 代表幹事校挨拶 伊藤 真宏 氏（佛教大学学長） 次期担当校挨拶 一楽 真 氏（大谷大学学長） 次期会場校挨拶 積 徹宗 氏（相愛大学学長）	立正大学 150周年記念館（13号館） B1階 ロータスホール	司会：淑徳大学

令和6年度 第31回仏教系大学会議研修会 会場

会場：立正大学 品川キャンパス

■アクセス

東京都品川区大崎4-2-16

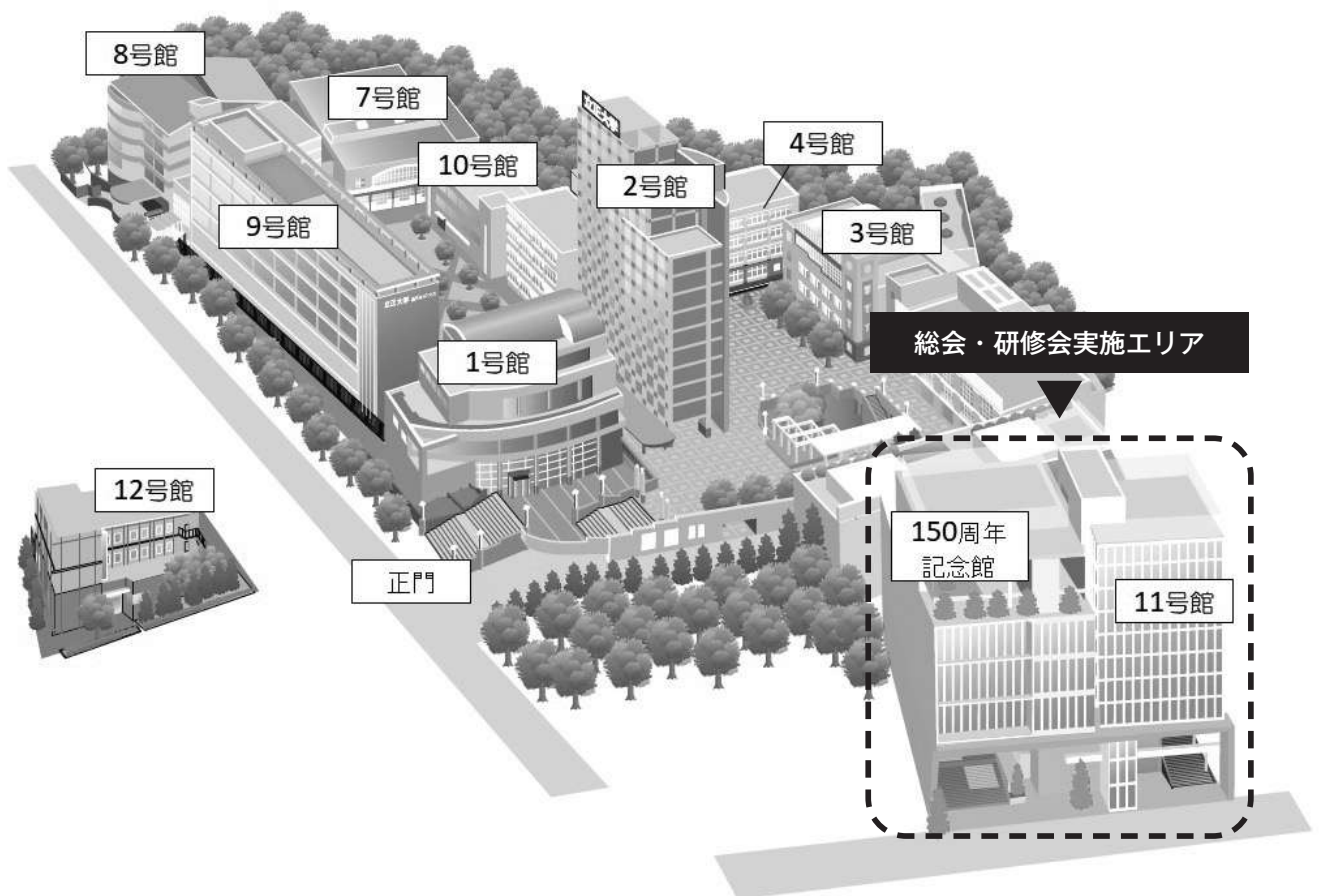
JR山手線大崎駅より徒歩5分、五反田駅より徒歩8分



■開催場所

幹事校会、幹事校事務担当者打合せ	第5会議室（11号館11階）
総会	第6会議室（11号館8階）
研修会	ロータスホール（150周年記念館地下1階）
懇親会	ホテルニューオータニイン東京

■キャンパスマップ



—— テーマ ——

仏教系大学における 質保証を深化させる 学生参画活動とは



▲開会式会場



▲仏事



▲開会式挨拶 佛教大学 伊藤真宏学長（代表幹事校）



▲開会式挨拶 淑徳大学・淑徳大学短期大学部
山口光治学長（担当校）



▲開会式挨拶 立正大学 寺尾英智学長（会場校）



▲キャンパス見学



▲キャンパス見学



▲懇親会



▲閉会式挨拶 佛教大学 伊藤真宏学長（代表幹事校）



▲閉会式挨拶 大谷大学 一楽真学長（次期担当校）



▲閉会式挨拶 相愛大学 积徹宗学長（次期会場校）



第31回 仏教系大学会議研修会 令和6（2024）年10月3日～4日 於）立正大学

今求められる質保証における学生参画をどう考え、実践するか

10月3日（木）

会場：立正大学品川キャンパス 150周年記念館（13号館）B1階ロータスホール

講師：山田 剛史 氏（関西大学教育推進部 副部長・教授）

司会 今日、この基調講演をご担当いただきます講師の先生は、関西大学教育推進部副部長、教授の山田剛史先生でございます。山田剛史先生については「今求められる質保証における学生参画をどう考え、実践するか」というテーマでお話を頂戴いたします。

それでは山田先生、よろしくお願ひいたします。山田先生のプロフィールは今日の開催要項に掲載させていただいておりますので、それに代えさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

山田 皆さま、こんにちは。関西大学の山田です。今回このような貴重な機会にお呼びくださいます。本当にありがとうございます。このすてきな会場もありがとうございます。

先ほどのオープニングセレモニーですね。皆さまにとっては日常なことなのかもしれないんですけども、僕にとってはこういうものに触れる機会というのは、葬儀とか、法要とかですね。故人を思いながら聴くみたいなことが基本なんですけれども、そうじゃない状況でこういうことに触れるというのは、本当になかったんです。

言っておられることは分からないんですけども、ずっとそこで聴きながら何とも言えない気持ちになって、ものすごく静かな気持ちになりながらも腹の底からエネルギーが湧いてくるみたいな、すごく複雑な気持ちになって、涙が目に浮かんでちょっとやばかったんですね。これは何なんだろうなと思ひながら、やっぱりすごい力があるんだろうなと思います。単純に僕がちょっと疲れすぎていて、気を付けなければいけないというサインなのかもしれないですけども。

僕にとってこのテーマがすごくチャレンジングでもあるし、自分が今までやってきたこと、高等教育のお仕事をやってきて行き着く、1つの大事なポイントがここなんだろうと思っています。なので、いろんな情報もあるんですけども、私の思いと共に今日はお伝えして、一緒に考える材料にいただ

ければ幸いです。

前置きが長くなりました。私のプロフィール、今日の資料になっています。

私自身は、2020年の10月に関西大学の教育推進部に異動してきました。もともと青年心理学を専門にしている、もっと言うと、自己形成を専門にしている、大学院時代も哲学や倫理学、自己と他者の関係みたいなことをずっとやってきました。今回、仏教が僕にとって少し懐かしさと共に何かあったのかもしれないと思っているのですが。

他にも専門テーマを紹介することは色々あるのですが、真ん中に書いている「誰もが自分らしく健やかに生きられる社会」を実現するための学校や教育、学びを探究するというのが、私がライフテーマにしていることなのかなと。そして、そういう思いを持った学校、先生、職員、大人のつながりをつくることなのかなと思っています。

いま、非常に大事な教育の大きな考え方の中にウェルビーイングが挙げられているんですけども、そのことも仏教との関わりが、すごくあるところなんだろうと感じています。詳しくはないので、あまり言うことはできないのですが、あらためて大事にすべきところに来ているだろうなと感じています。

私は東山中学・高等学校という、京都の佛教教育



関西大学教育推進部 山田剛史 副部長・教授

学園が母体の学校で教育顧問というかたちでお仕事をしています。もう10年近くなります。先生方と一緒に学校づくりをやっていきます。

そのことと、東山中高の前に飾っている「共に生きる」、この「共生（ともいき）」の考え方、これが今日の学生参画を考えるとにも結構大事なテーマなんじゃないかなと思っています。お叱りを受けるかもしれませんが、このキーワードは、僕の中には折に触れて出てきます。そんなことも頭と心で感じながら今日のお時間を共有できれば幸いです。

まず、そもそも高等教育の質保証における学生参画とは何なのかというお話をしたいと思います。それから、質保証における学生参画の実践ということで、実際にこれに近い取り組みを各大学でもいろんなことをやっていて、あれも学生参画なの、これも学生参画なのというところが皆さまおありだと思うんですけども、その実践を整理する、枠組みをちょっと考えてみたということもご紹介させていただきます。

本学でも、私個人として取り組みつつ、それを組織的に展開することにつなげられないかという試行がありますので、少しご紹介したいと思います。

まず、高等教育の質保証における学生参画について。1つは国際的な趨勢も相まってということで、海外の、とりわけ欧州の動きが活発というか、もともとそこから出発してきている理論、考え方、概念でございまして。それが日本に入ってきて、その重要性が高まって、それが来年度から始まる第4期の認証評価でも注目されているということです。

ただし、質保証における学生参画というのは想像以上に複雑で難しいと思っています。ただ学生に何かをさせれば良いという単純なものではないということです。委員会をつくったり、ワーキンググループをつくったりするだけで本当に質保証足り得るのかということですね。そこらへんも少しお話をしたいと思います。

私自身が問いとして持っているものなんですけど、そもそもなぜ質保証において学生参画が求められているのか、求められるようになったのかということところが1つ。では、高等教育の質保証における学生参画とは何なのかということが2つ。そして、ここらへんから難しくなっていくんですけど、そもそも学生が何に対して、どのように参画すれば高等教育の質保証につながるのかということです。ここが、とても難しい。

ここには学長先生はじめ大学の重要な責務を担っておられる方々がおられるので、ここを考える必要があるんだろうと思っています。私たち教職員や大学執行部の方々は、学生という存在をどういうふうに捉えているのかということがとても大事ということです。

では、背景のほうからですが、先ほども申しましたとおり欧州の動きです。具体的には、欧州において高等教育圏を構築していく「ボローニャ・プロセス」というものが1999年から始まっています。陸続きですので、どの国でも共通言語をつくっていく。学位の質の保証であったり、質保証要求が非常に高いエリアでもあるということもあるので、学生が国を越えて移動しながらもちゃんと高等教育が受けられるというように仕組みをつくっていくという、そういうチャレンジです。

その中で質保証のアクターとして学生に着目するアプローチが出てきます。ガイドラインを2005年につくり、2015年に改訂しているESG（欧州高等教育地域）というのがあるんですけども、この中で明文化されています。そしてその動きは、他の国にも、また日本にも影響しているということです。

外圧じゃないかという思いも出てくるんですが、多少そういう向きはあると思います。日本の認証評価団体の一つである、大学基準協会は国際的なアクレディテーションのネットワークの認証も受けていますので、諸外国からのプレッシャーもあります。

もう1つは、教授から学習へのパラダイムシフトです。この間、世界の趨勢としてteaching to learning（ティーチング・トゥ・ラーニング）がいわれています。教員が何を教えるかではなく、学生が何を学び身に付けることができるのかという観点から高等教育を再構築していくという発想です。日本ではディプロマポリシーという呼び方をしますが、ラーニング・アウトカムズに基づいてカリキュラムや授業をセットしていく、バックワード型デザインによる学位プログラムの構築です。学習成果基盤型教育が推奨されており、各大学が取り組んでいます。

この2つの動き、学習を重視する動き方と、質保証における学生参画という動き、この2つの動きが背中を押すかたちになって、今回の第4期認証評価の方向性の中にも含まれてきたということになります。

大きく6つの観点が新しいものとしてあるんですけど、最もこの6つの中で重視されているのが、ご承知のとおり1番です。「学修成果を基軸に据えた内部質保証の重視とその実質性を問う評価」というのが、この6つの中でもとりわけ重要視されています。

本学も来年度第4期の1巡目に受審しますが、この1番を軸にしつつ、4番についても1つの観点としては入っています。基準としてということまではいっていないんですけども、いま、内部でもいろいろ議論しているところです。

こうした流れの中で、もう一回立ち止まって考えてみたときに、私たち大学人は学生の視点でそもそも大学教育を考えられてきたんだろうかということ

です。

2040年に向けた高等教育のグランドデザイン答申(2018年)で、先ほどもありましたが「学修者本位の教育」ということが言われています。その中では、学習者が何を学び身に付けることができるのかを明確にして、学習の成果を学習者が実感できる教育を行っていることが指摘されていたわけですが、この話って全く新しい話ではないのですね。

2000年のいわゆる「廣中レポート」の中にも、「真に実効あるものになるためには、教育を提供する立場の論理だけではなく、学習する側である学生の立場に立ったものとして進められる必要がある」と記載されています。学生支援のトーンが強いものですが、2000年には学生の立場に立って考えようよということがうたわれていた。にもかかわらず、2020年ぐらいのここでまた「学修者本位の」という言葉が出てきた。

ということは、私たちはこの20年でここに到達できていないという反省をする必要があるだろうと個人的には考えています。何か新しいことを言われているというよりも、どうすれば私たちは学生という存在を、学習という対象を中心に大学教育を考えていけるのかという、その1つの運動を、学内のいろんな力学を調整していく、そのための装置としての教学マネジメントだったり、アクティブラーニング、その他いろいろなものがあると思うんですけど、大事なのはここなんじゃないかと思うわけです。

学修者本位の教育とか学修成果の可視化とか、中でも「教員目線ではなく学生目線」というのがずっと言われていますが、なかなか教員の中で腹落ちしないんだと思います。それで「ディプロマポリシーを学生と共有し、学生自身がDP(ディプロマポリシー)にどれだけ近づけたかを学生自身がエビデンスをもって説明できるようになること」というふうに言っています。

いま、学修成果の可視化っていうと、先生方が一生懸命アセスメントプランなりをつくって、いろんなアセスメントをして、データを取って、分析をして、執行部にフィードバックをして、ダッシュボードをつくってやるんですけども。でも、最終的には学生自身が、自分がこういう力を身に付けることができたということを、学生自身が自分で実感をもってエビデンスと共に語るができるようになることが目指されるゴールなわけです。

可視化のための可視化であってはいけなくて、可視化の目的は、学生の学びと成長を促すということにはかならないわけですので、正直言うと、あまり言葉に踊らされる必要はないのかなと思っています。学習者の目線に立てば必然的にそうなるかと思っています。

そして概念の話なんですけど、実はこのワンフレー

ズが難しいという理由は、いくつかのパーツが複合的に絡み合っているからだと理解します。最終的に、右側にあるとおり「高等教育の質保証における学生参画」とは、シンプルに表現すれば、学生参画によって高等教育の質保証を実現しようとする試みということになります。

そもそも高等教育の質保証って何やねん。もっと言えば高等教育の質って何やねん。ここの階層性を押さえていかないと、学生が何かに参加していても質保証につながらなかつたり、質の向上につながらなかつたりとかすることがあると思うので、この3点を押さえておく必要があるだろうと思います。

質のことで言えば、こういう捉え方もあります。大きくは2つ。1つは高等教育にふさわしい目的が設定されているかどうかということです。ディプロマポリシーというのはその1つだと思いますが、どういう学生を育てるのかということに対する明確な方針です。これに対する充実度合いから学生の学習が向上していると、一定の範囲内における学習経験の文脈性から解釈されることである。ここで言う「向上」とは、学習目標、経路、環境に介入することによって学習のプロセスとプロダクトが向上するということです。非常に重要なキーワードの1つは、プロセスというものが上がっているということです。

ラーニング・アウトカムズや学修成果が取りざたされるようになって、私たちはアウトカムばかりに目が向きます。これはアメリカでも、アウトカムのジレンマ、結果ばかりが注目されてしまい、プロセスが大事なにもかかわらず、そこばかりが強調される。

であるとすれば、結果さえよければいい。例えば語学なんかでも、帰国子女で留学していた子はTOEICやTOEFLのスコアは高い。じゃあ、授業に出なくていいのね。そういう話には当然ならないわけですが、ややもするとそういうことにもなりかねないわけです。

なので、もっとプロセスを大事にするような学習改革が本来必要であるということも、この中ではうたわれています。こういうことができているかどうかを大学内部の質保証、それから外部の質保証で確認していくということになります。

徐々にこの中身というか、参画というもののの中身に入っていくんですが、その概況を押さえつつ、なぜ「学生参画」という言葉を使うのかということにも関わるんですが、「参加」と書かれていたり、「参画」と書かれていたりあるんですが、英語だと「student engagement(スチューデント・エンゲージメント)」と書かれたりします。

左側にある「参加のはしご」というものが、メタファーとして使われたりしています。要するに市民の育成ですね。高等教育の文脈に落とし込んだとき

に、この0から8までの段階があるということが言われています。

これを自分たちの大学での大人と学生の関係に当てはめてみたときに、いったい自分たちの大学はどのレベルにあるのかということのを少し考えてみていただくと、下のほうは、沈黙、操作、装飾ということで、学生の主体性はほとんどありません。大人がほとんどルールを決めて、大人が決めたとおりに学生は乗っかっていくだけです。このレベルではないよねと言いたいところなんです。でも一番下、沈黙なんです。大人も生徒も生徒が貢献できるとは考えていない。大人が全て主導し全ての意思決定を行う一方、生徒は沈黙している。全ての学生には当てはまらないかもしれませんが、こういう学生は少なくないんじゃないかなとも思うんです。どうせ自分が関わったって、自分が言ったって何も変わらないでしょうという沈黙ですね。

そこから上の方に上がっていくんですが、自分たちの大学で学生参画を考えるとどのレベルまで上げていくのかということのを考える1つのツールになるんじゃないかなと思います。上のほう7番とか8番になってくると意思決定のかなりの部分にその主導性が認められます。対等な関係です。6番とか5番は、あくまでも教員がリーダーシップを持っているんだけど、そこの中に学生も関わっているというレベル。4番とか3番というのは、見せかけとか大人による指示ということで、僕はここが多くなるんじゃないかなと思っています。

つまり、学生が参画するかたちにはなっている、さっき言ったような委員会やワーキングはあるかもしれないけれども、教職員が監視・監督して、そこで出てくる意見に対して「こういうのは無理だ」とディフェンスしたりするみたいな。学生が本当に表現したいことを対等な関係の中で伝えるというよりも、大人たちに言わされている状態になる。これだと本当の意味で学生参画足り得るんだろうかということです。それでもいいんだということもあるかもしれませんが。ここを考えていくということなんだと思います。

もう少し整理をするために、学生の役割についても少し触れておきたいと思っています。この研究では大きく学生の役割を4つに整理しています。

1つは情報提供者です。例えば授業評価アンケートもそうでしょうね。あくまでも情報を提供してもらうというようなやり方です。判断するのは全て教職員であるということです。アンケートもそうですが、自分たち学生自身がその質保証に係るいろんな道具立てに対して、一定のコミットをしている状態です。場合によったらデータの分析に関わったり、そういうことも含めてです。

3つ目、学びの専門家という考え方があります。

これはヨーロッパでも、みんなそうだというわけではありません。そうだとみなす立場と、それは無理だろうという立場は拮抗しています。日本に置き換えたときに、学びの専門家足り得るのかと、自分たちの大学の学生を思い返したときに思えるかということ、「ノー」というのが正直なところかもしれません。年齢構成にもよります。日本の学生は大半が高校からそのまま大学に上がってきます。社会経験もほとんどありませんので、学び手としては初学者に近い。こうした学生たちを学びの専門家と見ていいんだろうかということは一応あるんですけども、こういう考え方もあるということ。

最後は学生をパートナーとみなすという立場です。教職員や学生が、パートナーシップの下で自分たちの大学を、教育をよくしていくアクターの1人であるというふうに認識し、動いていく立場です。これも、皆さまの大学でどういう立場でいま、学生たちが関わっているんだろうか、どういうふうな立場まで学生参画を通して持っていきたいのか、ということを考えていくことになるかと思います。特に左側は、スチューデント・エンゲージメント、学生参画というものが成り立つための前提として、トラスト (trust) であったりカレッジ (courage) であったり、こういうものが大事だよとされています。

その中には、パートナーシップ、ラーニング・コミュニティーズと書かれています。最終的にはこういうことが目指されるべきというふうに議論されていたり、また、エンゲージメントのヒエラルキー、理解の形成からカリキュラムの形成からコミュニティーの形成など、どこを目指すのかによっても、動き方、何をするか、どうしてもらうかっていうことは変わってくるということが整理されていたりします。

このへんは本当にいろんな議論がありますので、これくらいにしておきますが、いずれにしても先行している欧州では、大学における学生のあり方に関する議論や研究が活発化したということです。これ自体、僕はとても価値があると思っています。学生ってどういう存在なのか。単なる消費者なのか、あるいは当事者なのか、どういう立場なのか。一般的なサービスに対する消費者と高等教育における学生との難しいところです。

学生は、ある意味サービスの受益者でもあるし、自分でそれをよくするための主導権を持っている存在でもあるということです。これがうまいとかまずいって話ではないというところがですね、高等教育における学生の立場を考えると難しいモデルになるんですが、学生参画のない質保証はあり得ないという認識までは至っています。

ということで、日本においてということですが、学習当事者とみなす、学生がいかに質保証に参画す

るか、基本的なコンセプトを含めて、組織的に検討、実施することが求められているというのが、いま、私たちに投げかけられていることだと思います。

ということで、実践を少し整理してみたいと思います。先ほどもお話ししたとおり、すでに多くの大学で学生を参加させる取り組みはなされています。それらの取り組みを少し整理したり位置づけたりしてみるということです。結論から言えば、認証評価の文脈で言われている質保証の学生参画にぴったりはまる取り組みっていうのは少ないと思います。

2つご紹介します。1つは、山田勉さんという方ですけども、博論を中心にまとめられている書籍の方で丁寧に議論して整理してくれています。質保証の学生参画、彼は「参加」と呼ぶんですが、参画の次元と構想と具体例というものです。

1つは、先ほどの情報源、補助、協働、主動という海外の研究者が整理した枠組みを山田さんなりに少し解体して4つの様態に分けています。そして縦に次元、いわゆるコース。マイクロ・ミドル・マクロ、みたいなものですね。この三層に分け、セルの中に、例えばこんな取り組みが入るんじゃないかということを取り上げられています。これも実践を見るためのツールになり得るのかなというふうに思います。

自分たちの大学でどのセルにどういう取り組みがはまるのかっていうことを見ることもできるかもしれませんが、大事なのは、情報は求めるけれども協議しないということが問題だということが指摘されています。なので、例えば、授業アンケートとか学生調査って書いていて、これが情報源だっていうふうに同定はしているんですけども、授業アンケートで質保証はできないのかっていうと、そういうわけではないんです。問題は、何をやるかではなくて、やったことをどう組織の中でちゃんと位置づけるかということです。逆に言えば、すごく言い方は悪いんですけど、何でもいいんだと思います。要は委員会をつくったとしても、学生の意見だよっていうことで、「はい、聞きました」と言って、そのまま右から左にすっと流す。これでは意味がないっていうことです。

私が整理したマッピングは本当に試論なので、このとおりではないっていうことはちょっとエクスキューズさせていただきます。マイクロ・ミドル・マクロと分けて、質保証の強度という観点で見たときに、こんなふうにマッピングできるかもしれないということです。

よくあるのがピアサポートだと思います。多くの大学がやっているんですが、ここがちょっと混乱してしまうところかな。ピアサポートのような学生が学生に対して行ういろんな支援の活動や、学内の出欠管理などの授業補助みたいな学内アルバイトとかです。ここは、質保証の観点から見ると、対象にし

ている部分が違うという感じです。

マイクロでは授業アンケートや授業コンサルなど、FD（ファカルティ・ディベロップメント）への参加ですね。例えば、医学部の先生方と話していると、医学部って、質保証プロセスに学生が関わるっていうのが割と当たり前ですね。でも、それはなぜできるか。

医学部を出た学生はお医者さんになる。お医者さんになると、同僚になるんですね。自分たちが育てた学生が、自分たちと直接つながる、社会に出てからのつながりがとても強いんですね。クラス長とかがいて、カリキュラムとかFDとかに学生が参加して発言するっていうのが、日常的だそうです。このFD参加っていうのは、先生たちと一緒に学生もFDに参加するというイメージです。右側のカリキュラム委員会にも学生が出席します。

学部代表、委員会出席、学生副学長、学生自治会とかですかね。このへんの取り組みは、この間もすでにあって。一番上の取り組みが、直結する狭義の質保証文脈の学生参画に相当します。特にプログラムレビューや質保証レビューです。欧州の高等教育圏における学生参画は、ここのレベルの話になります。

どういうことかと言うと、例えば、自己・点検評価書を各部署等が作成する。そして、それらのチェックやピアレビューを学生が担うというイメージです。そんなことできるのかと思われるかもしれませんが、こういうことを欧州のほうではやられているということになります。後で紹介しますが、日本でもそういうことをやろうとしている大学がぼちぼち出てきています。なので、まったくの絵空事ではないという話です。これはあくまでも山田のマッピングですので、繰り返しになりますが、下にあるけれども、扱い方によっては上に行ったりすることもあり得るということでご理解いただければと思います。

そうした実践が『Between』の記事の中でも紹介されています。これもさっきのマッピングと見比べてみると、ピアサポート制度やピアチューターが入っていたり、質保証の文脈で見たときの距離感っていうのは、多少あるんじゃないかなと思います。

いろいろと取り組みがあって、立命館のAPU（立命館アジア太平洋大学）では、高校生副学長や大学生副学長の制度を早速取り入れ始めたりですね。ちゃんと公募したりとかして、かなりきっちりミッションがあって、責任や権限があってというかたちですね。山形大学でもみらい創出会議委員会任命式をやられたりですね。こんな感じで組織の中で学生になにがしかの任命をする。学生にとってはそうやってすごく大きいことだと思うんですが。

他方で、先ほど来からお話ししている欧州だと、

いずれの大学もかなりカリキュラムに関わっています。カリキュラムや教育プログラム、学位プログラムのレビューに関わっています。当然、そういうことができる学生の選出基準であったりとかですね、一定の研修であったりとかですね、そういうことは当然やっていくわけです。

一昨日の月曜日に文科省の仕事で新潟大学に行ったときに、知り合いの教員から伺ったのですが、新潟大学は学位プログラムを柱としています。学部という組織はあるんですけど、基本的には主専攻（メジャー）、副専攻（マイナー）のプログラムで構成されています。例えば人文学部の中に3つの学位プログラムがあるみたいな、こういう感じですよ。

10の学部で37の学位プログラムを持っているのですが、その評価をどうするかというときにですね。学部の中での自己点検もやりますが、学部の中の自己点検だけだと、ピアレビューとして機能しにくいので、外側にワーキンググループをつくります。そのワーキンググループに各プログラムから1人ずつ、つまり37人の教員に出てきてもらって、そこにこのスタッフが2人と座長の先生が入って40人で構成します。その40人を1つのプログラムに対して、2人ぐらいの先生でマッチングして、しかもそれは、どんぴしゃの分野ではなくて、ちょっとずらして充てる。で、ここに学生が入るということです。一定の研修を受けた学生がそこに入って、教員と一緒に学位プログラムのレビューに関わるということですので、これは欧州型の新しい取り組みになります。どれくらい実効性があるのかということ、やってみないと分からないと思うんですが、こういうチャレンジを今しようとしているということです。

そう考えると、うちでやっているものは十分ではないんですけども、何かご示唆をいただければということで紹介したいと思っています。

これらの観点で見ると、学生参画をやれているというところは、自治会の力が結構大きいという感じですよ。これがバックボーンにあって、つまり学生代表みたいなのが選出されて、組織があって、一定物を申すという機能が実装されているところというのは、立命館なんかもそうなんですけど、やっぱり強いなと思います。本学は自治会を解体しているのですが、そういうところがない中で、どうやって組織化するかというところを今いろいろ試行錯誤しているところですよ。

そのためにも、学生たちが、そもそもそういうことに関わりたい、関心を持っているのかということを知りたいなと思って、アンケートを採ったことがあります。肯定的なものとして、「やる気があれば学生でも関西大学の意思決定に関与できると思う」が44.6%、「学生の意見を積極的に取り入れて

くれていると思う」というのが43.4%でした。この結果を高いと見るか低いと見るか。

取り入れてくれているかどうかじゃなくて、そういうことに関わってみたいと思うかということを知りたいなと思って、たぶん聞いてみたらよかったなと思ったのですが、たぶん聞いても、それはほとんど手が挙がらないと思います。皆さんのところだったらどうでしょうか。

こういう感覚を、少しずつ声を出してもいいんだという、大学の風土っていうものをつくっていかないといけないと思って、このデータなんかを見ました。先ほど自己紹介でお話ししたとおり、コロナ禍で関大に異動して、授業はオンラインでした。オンライン授業でどうやったら学生同士がつながれるとか、いろいろやっている中で、学生自身が、コロナ禍で自分たちはこんな思いを持っているんだっていうことを、大学の人に聞いてもらいたいっていう学生がぽつぽつ出てきたんですよ。

それなら、その思いを伝えるための緩やかな運動体をつくらうということで、学生のプラットフォームをつくって、そういうことをやってみたい学生をユニット化して動くということをやってみました。

これは単位にもならないし、卒業要件とも全く関係ない。授業で出会った学部や学年の違う学生たちが、教育のために、学生のために何かしたいということを受けて、それをプロデュースするという立場でプラットフォームをつくりました。「関大をデザインする」というユニットでは、コロナ禍で私たちはこんな思いを持っているんだっていうことをまとめてくれたので、教職員向けのフォーラムで登壇してもらったりしました。

「MOCA (Meet On Creative Academy)」というユニットは、「いい授業って何なのか」といった問いをもとに、4人のメンバーが10名を超える学生たちにインタビューをしてくれました。自分たちでインタビューの逐語録を書き出して、卒業間際まで一生懸命みんなで取り組んで、最終的には25ページぐらいのフルレポートと2ページのダイジェストをつくってくれました。それを会議などで配布したり、執行部の方にもお渡しをしたりということもしてきました。

後でも少しまとめますけれども、とても難しいなと思っています。こうした自発性に基づく学生の発掘やリクルーティング、モチベーションを含むコミュニティの形成・維持って、とても難しい。相当のシャドーワークが必要だし、悩んでいるところですよ。

異なるアプローチをとということで、授業をつくりました。「未来の大学を創造する」というPBL型の授業ですけど、関大の教育課題の解決や新たな提案を行うことを目的にした、いわゆる大学をターゲットにしたサービスマーケティング科目みたいなもので

す。2023年度の1期生は、4人という少ない人数でスタートしました。4人なので研究室での授業を基本としながら、学内の庭など色々な場所でも授業したりしました。いま文科省のお仕事でアントレプレナーシップの取り組みに関わっているのですが、デロイトトーマツの担当者が打合せに来てくれた際に、授業でプレゼンや学生たちとディスカッションしてもらったりしました。最終成果発表会には、本学の教職員にも参加してもらって、学生のプレゼンを聞いてもらって、質疑応答もしてくれました。授業の性質上、15週かけてこのようなさまざまな取り組みを通じて大学について知ってもらうことができました。

学生たちと話したときに、「私たち学生は大学のことを何も知らないんです」と。「知らないのに何か言うっていうのは、アンフェアだと思います」と学生自身が言うんですね。「私たちも大学のことを知りたいし、その上で自分たちの思いも届けたい」といった学生が少しですけどもいる。学生たちに教育を通して大学への解像度を高めてもらって、提案をってもらうっていうのもありじゃないかということと授業の設置に至りました。いま2年目で、相変わらず6人と少数ですけど、学生たちと議論しながら授業を展開しています。

これだけではあまりにも草の根すぎるというか、規模感も小さすぎるので、学生のインタビューを企画しました。この10月1日から、学長をはじめとした全執行部が交代して新執行部になったのですが、この案件をどのタイミングで学部長・研究科長会議にかけるか、新執行部に入ってからの方がいいだろうということで、ちょっと待っているという状態です。予定では11月の上旬から実施する運びですけども、質保証に関わる学生インタビューを行うことを予定しています。

私が主で携わっている教学IRでは、いろんな調査をやっているんですけども、定量的な調査が基本です。どうしても約3万人の学生がいますので、なかなか定性的な調査は手をつけられなかったんですが、定量だけでは見えないことっていうのもあるし、学生の声をもっと大学の関係者に聞いていただきたいということもあるので、インタビューをやるということになりました。

学部4年生50人を目標に、13学部ありますので、各学部・学科・専攻の入学定員に応じて1名から5名ぐらい張り付けて、ランダムサンプリングで50名選出（理論値）して、その数倍にのぼる学生らに依頼をかけていきます（確認・返事をしてくれない学生、断られる学生も相当出ることが予想されるため）。返事・許可が得られ次第、日程調整に入り、オンラインで40分程度ずつインタビューをすることで作業を進めています。

DPの獲得感とカリキュラムの関係、共通教養と専門教育の接続、初年次教育、学習支援など、予め作成してもらったフェイスシートや学部コースツリーを共有しながら、インタビューガイドに沿って話をしようというふうに考えています。

こんな感じで、私自身がいろんな大学の取り組みを見たり、自分自身も自大学でチャレンジをしてみたりしています。結局、何をずっと悩んでいるかということ、「やらされ感のない学生参画にどうやったらできるのか」ということです。自律的・継続的な学生参画をいかに組織的に行うことが出来るのか。組織的にとなった瞬間に、業務的・管理的になってしまい、自主性が狭まってしまう。だけど、そうしないと学生を集めることが難しい。このへんの塩梅をどうするかということをごく悩んでいます。

学生自治会などの組織とか仕組みがないと、こうした活動に継続的に関わってくれる学生の確保が難しいと思っています。ピアサポート、学内アルバイトとは、対象、目的が違うので、ここからアプローチしていくのもちょっと難しい。そもそも、こういう活動を所掌している部局が違ったりもして。

よくあるのが各学部から何人出してくださいっていうやり方ですけども、これはどうかなと思うんですね。そもそも学部の側の理解が必要です。学部の側からすると、何でその学生なんだっていうこともある。

なかなか理解を得るのも難しいし、やっぱり学生のモチベーションですね。単発イベントに巻き込むぐらいだったらいけると思うんですけど、継続的にとなると、どうしても限られた学生生活の中で学生は日々動いているので、やらされ感が途端に強くなってしまいます。先ほどの学生インタビューもどういう4年生を対象にしようかっていうことは結構議論したんです。例えばGPAいくら以上の学生とかって言いたくなるんですが、必ずしも成績がいい学生だけじゃない学生こそ、本当の意味で改善に必要な要素を持っているかもしれないと考えたら、ランダムにしようということで計画しています。

認証評価の実地調査とかで出てくる学生さんは、本当に素晴らしい学生たちばかりですね。こんな学生たちばかりだったら何も苦勞しないと思うんですけど、それだとどうしても大人に付度するような意見になってしまってもいけないので、なかなか難しい。学生もいま忙しいです。授業も専門科目も忙しい、資格取得も忙しい。みんな就活にご執心だし、なかなか学びに向かうこと自体も難しい中で、大学の教育改善に組織的に関わってみないかということがですね、わくわくする取り組みになり得るのかっていうと、なかなか難しい。アルバイト、サークル、交友関係、就活、みんなそこで大半の時間を埋めていきますので。

その中でどうやっていくのかというときに、まずわれわれ大人が学生をどう捉えるかっていうことをまずは考える。いや、学生なんてそんなこと言えないっていうことでいくのか、ちゃんと聞いてみようというふうに考えていくのかですね。そうしないと、学生参画が認証評価で求められる。じゃあ、学生〇〇委員会をつくるぞってなっても、たぶん、ほとんどうまくいかないと思います。というところが肝なんだらうと思っています。

最後の締めとしてはですね、「和合」という考え方は僕も好きなんですけれども、和合の精神で、大人と学生とが共に学び成長し合う大学をつくるということをやっている中で、学生参画というものが意味を持ってくるんだらうと。理想論かもしれませんが、そんな大学づくりを、いま、非常に大学経営も厳しくてですね。今朝のニュースを見てショックだったのは、今年の2月に研修に行った大学なのですが、エンゲージメントをみんなで高めていこうとやっていたら、今日、理事長から募集停止という記事が発出されていました。僕が最後の研修だったのかなって思うと、やるせない気持ちになりました。

そういう中で、どうやって学生と一緒にこれからの大学をつくっていくかということ、学長を中心に舵を切っていくことが大切なんだらうと思っています。そんな新しい大学づくりの1つとして、学生参画を考えていくことが大事なのかと思っています。

ご清聴どうもありがとうございました。

■質疑応答

司会 山田先生、ありがとうございました。

それでは、質疑応答の時間とさせていただきます。質問がある方は挙手をお願いいたします。

九州大谷短期大学 吉元 信暁 学長

九州大谷短期大学の吉元信暁と申します。先生、今日はありがとうございました。いろいろ先生ご自身もご苦勞をされながら取り組んでおられるということがよく分かりました。先生が今まで取り組まれた中で、学生から上がった声が実際に教育改革につながった事例があれば教えていただけますでしょうか。

山田 ありがとうございます。何だかんだで大学を4年から5年ぐらいの周期で動いているものですから、学生の声を拾うところ、伝えるところがやっとなできて、それが改善につながるころまでなかなか追いかけていないんです。

例えば、先ほど紹介した「大学創造ゼミ」という授業の学生が言ってくれたことがすごく印象に残っ

ています。シラバスを見ても分からないんです。実際に行ってみたら全然違うし、もっと授業の雰囲気分かるようなことをしてもらえないかという話をしていたんです。動画とかがあって言われて。確かに、いま、簡単に2、3分ぐらいで動画を撮って、リンク貼って、この授業ってこんな授業だよと先生が言ってくれたらいいよね。でも、それを全学改革につなげるって相当大変なので、まずは自分のシラバスの中に、「学生の声」を載せるようにしたんですね、備考欄に。テキストにはなりますが。

でも、そのテキストを載せたら、今期とかも「学生の声を見て、この授業は面白そうだと思って受講しました」みたいなのがあるので。いまシラバスの改修をやっているんで、この視点を生かせないかなと思っています。学生に言われたことから出発しているので、小さいんですけども、これも1つかなというふうにお答えさせていただきます。

吉元 ありがとうございます。

花園大学 磯田 文雄 学長

花園大学の磯田文雄と申します。京都大学や東京大学、名古屋大学、筑波大学、広島大学などの、高等教育の質の問題について研究している拠点だったところが次々と変容してしまっている現状があるかと思っています。われわれは私学の仏教系の者なのですが、この問題に対して、学内をどういう体制にして取り組んでいけばよいか、アドバイスがございましたらお願いいたします。

山田 高等教育を地に足を着けて研究したり、いろいろな大学に参考に資する取り組みを全体で見ると、そういう機能全体が日本の中で弱体化してきているというのが、先生が今お話しいただいたとおりだと思います。

ただ、学内情勢、予算、いろんなものが厳しくなっていく中で、僕も常に緊張感、いつでもつぶされるかもしれないという緊張感を持っています。

そういう中で、実践にもっとコミットして、泥くさい仕事をやらないと、理解していただけない、信頼していただけないんだらうとは思っています。実践と切り離れた研究だけで高等教育を見通すには、あまりにも現場が複雑すぎるんだと思います。

学生参画について、いま、学内には学生が関わっている活動としてどんなものがあるのか、どの部署がどんなことをしているのかというのを、整理・可視化して、そこから学生参画につなげられそうな種がないかどうかを行うというのが1つ。その上で、大学執行部の中で、学生参画、もっと言えば内部質保証についての共通理解を高めていく。

その上で、学生参画をどうするか、学生をどう見

ているかということ、膝詰めで議論することが大事なんだろうと思います。拙速に動くよりも、学内に根を張ってリサーチをして、コンセプトを考えて、議論をして。そうでないと学生参画ってうまくいかないだろうって思います。

磯田 ありがとうございます。

**岐阜聖徳学園大学 岐阜聖徳学園大学短期大学部
観山 正見 学長**

岐阜聖徳学園大学の観山正見と申します。今日はどうもありがとうございました。「大人と学生が共に学び合い成長し合う大学を」というのは非常に素晴らしい理想だと思います。しかし、学生といっても非常にバラエティーがありますよね。後半にちょっと難しい面を紹介されていたので、共感する面が非常に多かったんですけれども。成績がいい学生もいるし、うちの大学を改革していきたいという意識を持っている学生も本学にはいるのですが、全体では多くはないので、どのように大学を変えていくかというのは難しい課題だと思うんですよね。準備期間も必要ですし。

私が思うのは、こういう欧州のいろんな先駆的なことを見てですね、例えば大学基準協会が、あなたの大学では学生がどのように参加しているか、ということをお急ぎに評価項目などに入れるということ、形式的になってしまいます。非常に素晴らしい目的だとは思いますが、どういうあり方が成功例なのかというのを水平展開した後に1つの指標とすべきではないかと思います。簡単に入れてしまうと、形式的な学生アンケートや学生インタビューだけの結果になってしまうのではないかと危惧しました。今日はありがとうございました。

山田 ありがとうございます。おっしゃるとおりだと思います。今回ご紹介しなかったんですが、この『Between』の中で一番伝えたかったのは、そのことです。拙速に動いてもうまくいかないよということ。

大学執行部の立場からすれば、認証評価でも言われているからってということでたき付けはするけれども、中身をどうするかはしっかり議論をしていかなないと、お互いにとって不幸になりかねないなと思います。貴重なコメントありがとうございます。

司会 山田先生、ありがとうございました。あらためまして、山田先生に盛大な拍手をお願いいたします。ありがとうございました。



京都文教大学「ともいきキャンパス」における質保証の取り組み

10月4日（金）

会場：立正大学品川キャンパス 150周年記念館（13号館）B1階ロータスホール

講師：河本 直樹 氏（京都文教大学 副学長〈教学・IR推進担当〉／教務部長／教育開発推進センター長）

司会 今般の第31回仏教系大学会議研修会は、「仏教系大学における質保証を深化させる学生参画活動とは」という統一テーマで行っております。本日は2つの事例報告をいただきます。最初に、京都文教大学副学長、教務部長、教育開発推進センター長の河本直樹先生より、「京都文教大学「ともいきキャンパス」における質保証の取り組み」について、事例報告をいただきます。

それでは河本先生、よろしくお願ひいたします。

河本 皆さま、おはようございます。京都文教大学の河本と申します。本日はこのような貴重な機会をいただき、ありがとうございます。今、司会の方からご紹介いただきました、京都文教大学「ともいきキャンパス」における質保証の取り組み」ということで、本学で行っている質保証の様々な取り組みについてご紹介させていただきます。本学は多くの取り組みを行っており、非常に雑多な話になってしまうという心配もしておりますが、少しでもご参考になる部分があればうれしく思います。

では、始めていきたいと思ひます。最初に本学の簡単な紹介をさせていただきます。本学は1996年に開設し、もうすぐ開設30年となります。学園の創立は1904年ですので、ちょうど今年が120周年ということになります。京都府の宇治市にございまして、学生数が1,900人弱の、小規模な大学ということになるかと思ひます。

本学は、こちらの仏教系大学の加盟校ということで、建学の理念は「四弘誓願」であります。こちらにお集まりの皆さまは、この「四弘誓願」ということについては、私よりもはるかに詳しいと存じますが、本学ではこれを「ともいき」という平仮名で、非常に簡単な短いフレーズで表現しています。共に認め合い、生かし合う、共に生き生きする。他者の幸せを自分の幸せと思える人になってほしいという

ことで、「ともいき」をできるだけ言葉として使うようにしています。

学部学科の構成は、総合社会学部、臨床心理学部、こども教育学部の3学部となります。総合社会学部の中には総合社会学科と実践社会学科があり、実践社会学科はちょっとユニークな学科として、この4月から開設しております。

次に本学の人材育成のイメージですが、まずは自分自身と向き合い、自省して、向上心を持って学び続けるという「自己対峙力」をしっかり身に付けてもらいます。そして汎用的知力と現場実践力、これを主に座学と実践を往還しながら、最終的にともいき社会を実現できる。そういった人材を育成しようというのが本学の人材育成の目標ということになっております。これは京都文教大学の「KBU 学士力」と呼んでおります。

いわゆる全学の共通科目として、「基盤教育科目」がございまして。基盤教育科目の上に学部学科の専門科目を置くのではなく、専門科目と往還しながら学んでいくというかたちでカリキュラムを組んでおります。

基盤教育科目の科目群としては、KBU アイデンティティ科目の仏教入門、大学入門、地域入門等、この辺りも「ともいき」という理念に沿った科目になっております。

教養科目は、具体的には様々な科目名になっていますが、ともいきを人間の心と体から考える科目群、ともいきを社会の生活と環境から考える科目群、ともいきをグローバルの視点から考える科目群の3つがございまして。このように建学の理念に基づく科目群の名称を付けて、「ともいき」がしっかりと根づくように使っております。

また、キャリア科目の中にも「ともいきとキャリア」、実践社会学科の科目に「ともいきプロジェクト演習」があり、様々なところに「ともいき」と付

けています。そういう意味では、学生にもかなり浸透しているかと思っております。

本学の「ともいき」という理念、精神をイメージとして表すと、このように学生を真ん中において、学生と教員や職員が一緒になってやっていくなど、地域の企業、自治体、小学校・中学校・高等学校の生徒たち、あるいは先生たちと一緒にやって行く取り組みが非常に多くございます。

このように、多くの学生が地域連携や社会連携など、ともいき的な活動に参画しています。例えば正課でいいますと、いわゆるインターンシップである地域キャリア実習や、地域ボランティア演習というのがあります。また、プロジェクト科目というものがあり、この中にも社会連携、地域連携に携わるような科目があります。加えて、各学科の専門の実習科目等にも同様の科目がございます。

正課外では、地域連携の学生プロジェクトや、高大連携のプロジェクト等で高校の探究学習をサポートするような活動をしているプロジェクトがございます。また、クラブ、サークルでも、同様のともいき的な活動、地域連携の活動をしているものもございます。

例えば地域キャリア実習では、「ともいきパートナーズ」と言いつつ、近隣の地域の企業や自治体等、現時点で94団体に協力いただき、インターンシップの受け入れをしていただいております。事前学習、事後学習等をきちんとやられているのは、どの大学も同様だと思いますが、最後の成果報告会では、受け入れ先の企業、自治体の方に来ていただき、学生の発表を聞いた上で評価・コメントをいただくこととしております。また、レポートも受け入れ先の企業、自治体に提出をして、学外の方からもしっかりと評価をしていただくことにより、質保証になっているものと考えております。

そのほか、地域連携学生プロジェクトのように、正課の実習科目やゼミ活動が発展してプロジェクトになっていくものもございます。教員のアドバイザーがつくほか、担当職員がサポートして、学生が本当に自由に行う課外活動ということにとどまらない準正課的な活動ということで、大学内では「準正課活動」と呼んでおります。

地域連携学生プロジェクトの具体的な流れとしては、4月の公募を受けて、5月に採択選考会がございます。このとき、学外の審査員として連携先の企業、自治体の方にお越しいただき、審査をしていただきます。その後、採択が決まれば活動が行われて、年度末の2月～3月あたりに成果報告会が実施されます。このときにも、やはり学外の方に来ていただいて評価をしていただき、しっかり保証してもらっているところが本学の特徴かと思っております。

次に、今年度採択されているプロジェクト、5つの団体をご紹介します。5団体合わせて、約130名の学生が参画しております。例えば「宇治☆茶レンジャー」というのは、宇治茶の普及振興で、宇治茶を通して交流を促す活動をしている団体で、その活動は15年と長く続いております。商店街活性化のプロジェクトも長く活動しております。「KASANEO(カサネオ)」というプロジェクトでは、ファッションを通して学生、若者と地域の高齢者が多世代交流を行っております。

本プロジェクト申請書は、採択選考会に向け、予算の計画も含め、かなり詳細なものを出してもらっています。

クラブ、サークル系の活動例としては、「学生防災支援団体イーサポ」という団体の活動が、まさにともいきの具現化かと思っております。これはもともと、「還愚セミナー」という、宗教委員会がやっている、学生と教職員の有志がお遍路のように各地のお寺を巡ってお勤めをする宗教的な活動でした。東日本大震災以降は、特に被災地のボランティアと組み合わせるかたちで実施しております。

そして、2014年から、「ともいきフェスティバル」というイベントを毎年12月頃に実施しております。今年は120周年記念式典と合わせて11月24日に行うことになっております。地域の住民、あるいは自治体、企業に様々なブースを出していただくほか、学生もゼミや学生プロジェクト等で様々な催しを行い、地域の子どもたちに楽しんでもらえるような、ともいきキャンパスの学園祭といったイベントになっております。

このように、本学の特徴的な取り組みを、特に「ともいき」というかたちで紹介させていただきました。これらは、学生が参画する様々な活動を大学や地域がしっかりと質保証している事例であると考えております。今回の研修会の統一テーマ・趣旨としては、大学が行う質保証の取り組み、いわゆるカリキュラムアセスメントのような取り組みに学生が参画するというのがメインの趣旨だと思いますが、これらを両方合わせて「ともいき」ではないかと考



京都文教大学 河本直樹 副学長

え、この度、紹介させていただきました。

後半は、大学の質保証の取り組みに学生が参画する事例をご紹介させていただきます。

第3期中期計画に掲げている本学の質保証の基本的な考え方は、「学修者本位で学生の成長を保証する」ということです。とにかく、しっかり学生に成長してもらい、成長した実感を持ってもらうということ。入学した全ての学生が各学科のDPを達成して卒業してもらい。結果的に「出会えてよかった京都文教」と思ってもらえるように頑張っているということです。

この考え方に従って、学生の成長を保証する様々な取り組みを行っております。それらを「学生の成長を確認する取り組み」と「学生の意見を聴取する取り組み」という観点で分類し、さらに「量的なもの」と「質的なもの」で分類することで、マトリックスに整理してみました。

例えば、学生の成長を確認する量的なものとして、成績評価、科目の到達目標の達成度の自己評価、DP達成度の自己評価、ベネッセのGPS-Academicを使ったスコアの伸長度、卒業率や進路決定率といったものがございます。

次に量的に採れる学生の意見ということで、授業アンケートをはじめとして、様々なアンケートを実施しております。学生もアンケートだらけでちょっと辟易している部分もあるかもしれませんが、だいたい毎年1回、あるいは毎学期1回実施しております。

そして質的に学生の成長を確認するものとして、卒論発表会のほか、SD研修で学内教職員に向けて学生に自身の成長を語ってもらう、オープンキャンパスで高校生に向けて成長を語ってもらう、キャリア系の科目でゲストスピーカーとして後輩に成長を語ってもらう、教育後援会で保護者に活動を語ってもらう等、学生に成長を語ってもらう機会が多くございます。

また、いわゆる質的なかたちで学生の意見を聞くものでいうと、インタビューやワークショップ等がございますが、これの本丸が、学生参画型のカリキュラムアセスメントになろうかと思えます。さらにポイントを絞ったかたちで、フォーカスグループインタビューのようなことをやったり、あるいは教員・職員・学生が一緒になってフリーに話し合う「しゃべり場」であったり、SA（スチューデントアシスタント）が授業の裏側（教える側）の目線で見られているので、SAの振り返りの機会をつくり、そこで重要な意見を述べてもらうようなこともございます。また、SAを何度か経験したSSA（シニアスチューデントアシスタント）が、新任のSAの研修等を手伝うような取り組みも行っております。

次に、学生参画型カリキュラムアセスメントのお

話をさせていただいて、その後、他の3つの事例を紹介させていただきます。

全学学生参画カリキュラムアセスメントは2019年から始めており、その際、目的や位置づけ、体制等がぶれないように明記し、基本的な考え方を示しております。学生参画のカリキュラムアセスメント以外にも、カリキュラムアセスメントチェックリストというかたちで、複数の項目を立てております。その中の1つに学生参画のカリキュラムアセスメントを位置づけているということです。さらに、学科ごとに行うものと全学で行うものというのを位置づけております。

全学で行うものは、学部長、学科長などの役職者が出席する教学会議をカリキュラムアセスメントの場として使っております。2019年から毎年実施しておりますが、行うたびにいろいろ反省がありまして、例えば、最初の頃は、カリキュラムマネージャー（学科長）が「うちの学科では、こういうふうに教育を改善しています、カリキュラムを改善しています」という話をして、それを受けて学生と対話をしていました。そうすると、先生が話しすぎてしまうということがあったりして、それなら次の年は、学生一人一人にしっかり話してもらおうとすると、学生からなかなか話が出てこなくて時間がかかりすぎたりすることがありました。そこで次の年は、あらかじめ学生に質問を投げかけておいて、話す内容を用意してきてもらったのですが、そうすると優等生の発表のような感じになってしまっていて、これもこれでどうかということになったりもしました。

そのようなことで、毎年毎年改善といえますか、試行錯誤しながらやっております。最近はグループワークのかたちで行うようにしています。2023年、昨年度からは学科単位でも実施しております。学生にグループワークをやってもらうときは、何か論点がないと話が深まらないということで、質問例や論点を示したりしております。

全体の構造としては、各学科でカリキュラムアセスメントを7月に実施し、その中で学科固有の課題のようなものが出てきます。それから全学的に関わるような課題も出てきます。学科固有の課題については、それぞれの学科で改善していくということ、そのPDCAのサイクルを回していくこととなります。各学科のアセスメントで出てきた全学的な課題というのは、この全学のカリキュラムアセスメントに持ち寄ってもらい、各学科のアセスメントに参加してくれた学生のうちの何人かが、この全学のアセスメントにまた参加してもらって、そこでさらにそれに関する議論を深めてもらうという構造で進めております。

次にカリキュラムアセスメントの実施報告書のフォーマットですが、これはカリキュラムマネ

ジャーに作成してもらい、学生の意見をを受けてKPTで整理をして、次年度に向けて何をやっていけばいいのかということに記載してもらっております。

続きまして、本学ならではの学生参画の事例を、3つほどご紹介させていただきます。

1つ目の事例は、中期計画検討ワークショップです。これは2021年に、2023年からの第3期中期計画の策定にあたって、学生を交えたワークショップを行いました。翌2022年には3日間、学生と教職員がグループになってワークショップを行いました。1日目、2日目とテーマをだんだん具体的に絞っていき、3日目は学生の居場所や学習空間、キャンパスのあり方というところにポイントを絞ってグループワークをしてもらいました。

その事例から、グループワークで得られた気付きとして、学生の居場所、学習空間、キャンパスのあり方を4つの区分に整理しました。「静かな空間」と「にぎやかな空間」、「くつろぐ空間」と「学習空間」という2軸のマトリックスになっていて、この4つのうち、にぎやかでかつ学習できる空間というカテゴリに当てはまるもの、つまり少し話もしながらグループ学習などができるような空間が、本学の場合ちょっと欠けているなどということになりました。そこで、昨年11月に、ちょっと話ができる、飲食も一応オーケーというかたちでラーニングコモンズを試行オープンしました。オープン後ほぼ1年たちますが、十分活用されていると言われると、ちょっとどうかという感じも実はあるのですが、学生の声がかたちになった事例のひとつです。

2つ目の事例はSD研修です。昨年度末に、学内の教職員向けのSD研修で、各学科の代表の学生に自身の成長を語ってもらいました。教職員からすると、学生の成長を知る、共有する機会となりました。語ってもらうポイントとしては、大学4年間で自分が特に成長したと思うこと、その成長を促した学習経験は何なのか、その学習経験を得るきっかけとなった授業科目はどういったものなのか、それから学習を支えてくれた大学のリソースについてなどです。

この事例から得られた気付きですが、例えば総合社会学科の学生が言っていたのは、いわゆる学外で行うフィールドワークとか、企業と取り組む実習の科目は1回でうまくはいかない。どうしても不本意な部分が残る。学生は「リベンジ」と言っていました。うまくいかなかったことをもう一回、また別の機会に行うというときに、前の失敗を生かして、もう少し改善していこうという、それを繰り返すことが大事だということを知りました。それにより、思考力や表現力が定着していくという話をしてくれました。

それを受けて、総合社会学科の2025年度のカリキュラムについて、まさに今、見直しているところです。そろそろ決めないといけないところですが、実習・演習系の科目をさらに充実させる等、そのようなことを考えているところです。

新設の実践社会学科は、そもそもそのような実践を何回も繰り返していく学科です。まずは体験して、それによって得た気付き、あるいはそれによって向上した意欲をまた学習に結びつけて、知識を得て、それを生かして、もう一回また体験して、ということを繰り返していくという学び方です。

それから臨床心理学科では、実践を踏まえた学びによる成長実感といったことを言ってくれました。また、日本語教師プログラムの科目を取っていた学生は、他学科の科目を履修することで新たな視点が獲得できたということも言ってくれました。臨床心理学科の場合は、いわゆる心理専門職、公認心理士といった専門職を目指す学生が一定おりますし、そのために大学院の進学を目指す学生も一定数おります。ですので、臨床心理学科の先生方も、どうしても、そういった学生のほうに目が行きがちであります。ただ、幅広く学びたいという学生や一般就職を目指す学生もそれなりにおりますので、そういうこともやはりきちんと考えていかないといけないなということを学科の先生方にも感じてもらった上で、2025の検討ワーキングを立ち上げて、学生のタイプ分類や、キャリア教育の見直し、経験学習の充実などを考えてもらっています。

3つ目の事例は、昨日、関西大学の山田先生がご紹介されていた事例とも少し似ているかもしれませんが、正課の授業で基盤教育のプロジェクト科目というものがございます。毎学期10クラス程度開講しているPBL系の科目です。このうちの1つに、「京都文教大学をよりよくするクラス」というものがございます。要するに、学生FDの正課化のようなかたちですが、学生はこの授業を受けることで、本学の教育リソースに対する理解が深まり、有効に活用できればさらに大学での学びが充実するということもありえます。また、PBLなので、問題発見、解決の技法を学ぶということもこのクラスの狙いでもあります。

大学側とすれば、この授業の中で学生の実態や意見を聞くことで、教育改善につなげられます。学生側とすれば、それで教育改善されれば、当然、自分たちにまた還元されるわけですから、まさに「ともいき」というものになっているかと思います。

この科目は10クラス程度あるので、最後に合同成果発表会というかたちで一緒に発表会をします。成果を動画で作成して、それをプロジェクト科目の発表会サイトに掲載し、そして全クラスで発表動画をお互いに視聴し合って、評価し合う。そのような

かたちでしっかりと評価をしております。

昨年度、4つのグループで検討してくれたテーマのうちの1つを紹介します。学生相談や担任制度について検討した学生のグループがありました。そもそも、先生たちは、おそらく学生が相談に来てくれることを歓迎していると思います。ただ、学生から相談に来ることはほとんどない。学生たちは、友達や家族には相談するけど、先生に相談したいとはべつに思っていないのではないかと考えていました。ところが、このときの学生に聞くと、実は相談したいことはいろいろある。ただ、先生も忙しそうだから、ちょっとしたことで研究室に訪ねていったり、アポ取りのメールをしたりすることはちょっと大げさかなという感じで躊躇すると言っていました。そこでもし、定期的な面談の機会や、先生と話す機会があれば、ちょっとしたことでも聞きやすくなるということでした。この意見を受け、これまで個別面談をあまりやっていない先生にもしっかりとやっていただくために、アカデミックアドバイジングというかたちで学生との振り返りの機会を定期的に持つようにしていく取り組みを推進しています。

最後に課題と今後に向けてですが、IR的なデータ分析を進めて、学生の学習成果や成長を可視化し、学習ポートフォリオやディプロマサブリメントのようなかたちに整備するということは本学があまりできていない部分ですので、進めていこうと考えております。各種アンケート等は定期健診に当たるようなものなので、これは継続しようと思っております。報告会やワークショップ等はどうしても優秀な学生や活動的な学生が参加してくれる感じになるので、この点はもう少し考えないといけないと思っております。

アカデミックアドバイジングで、全ての先生が学生と振り返りの機会を持ってもらうということになれば、その際にカリキュラムについての意見や声も聞けるので、その点で連携すれば、質的な意見も悉皆で採れるということにもなると考えております。

この後の山咲先生のところでは、しっかりと学生参画によるカリキュラム・コンサルティングの取り組みを行っておられ、認証評価で長所として取り上げられておられますので、この後のお話にご期待ください。私の話も、本当に少しでも参考になるところがあれば幸いです。どうもありがとうございました。

■質疑応答

司会 河本先生ありがとうございました。せっかくですので、フロアの方からご質問がございましたらお手を挙げていただければと思います。

九州大谷短期大学 荒川 大地 地域連携センター長

九州大谷短期大学の荒川と申します。貴重なご報告をありがとうございます。大変勉強になりました。本学としても地域と一緒に様々な学びを深めていこうと、経験型の取り組みを始めているところですが、数点、教えていただきたいです。

地域連携学生プロジェクトの中の採択選考会や、中期計画検討ワークショップへの参加学生について、中には準正課学習というふうにも言われていましたが、この学生たちの出席の扱いや授業コマの扱いはどのようにされているのでしょうか。また、学生が10名ほど参加して全学アセスメントに関わっているというお話でしたが、この学生10名はどのように選んでいるのか、もしよければ教えてください。

河本 ご質問ありがとうございます。地域連携学生プロジェクトは、準正課とは言っているものの、いわゆる正課ではなく、単位とは関係ありませんので、そういう意味では出欠等についてきちんとしたルールのようなものはないです。

ただ、準正課と言っている意味は、しっかりと教員がアドバイザーとして指導や助言をしている部分や、評価をきちんとしている部分が、単なる課外活動ではないという意味でそのような言い方をさせてもらっています。

また、学生参画アセスメントの参加学生は、その募り方も実は年々試行錯誤してしまっていて、最初は学生自治会からの推薦で来てもらいました。その後、公募したこともありますし、各学科から推薦してもらったこともあります。どの案がいいのかというのはなかなか難しく、本学でも試行錯誤している状況です。

荒川 ありがとうございます。ということは、基本的に、前のめり、本当に主体的に動く学生層が集まってくるという感じでしょうか。

河本 自治会の学生は、やはり意識が高いと思いますし、学科で推薦して来られる学生も比較的優秀な学生が多いです。

荒川 分かりました。ありがとうございます。

司会 お時間の関係で、これで質問を打ち切らせていただきます。あらためまして、河本先生に盛大な拍手をもって感謝を伝えたいと思います。ありがとうございました。

教育の質保証に係る学生参画型の取組 —広島市立大学におけるカリキュラム・ コンサルティングに注目して—

10月4日（金）

会場：立正大学品川キャンパス 150周年記念館（13号館）B1階ロータスホール

講師：山咲 博昭 氏（広島市立大学 教育基盤センター 講師／センター長補佐／大学評価・IRセンター講師／理事補佐／理事長室副室長）

司会 それでは、定刻となりましたので、事例報告Ⅱを始めさせていただきます。2つ目の報告は、「教育の質保証に係る学生参画型の取組 広島市立大学におけるカリキュラム・コンサルティングに注目して」となります。ご講師をお務めいただくのは、広島市立大学教育基盤センターの講師、山咲博昭先生です。

それでは山咲先生、よろしくお願いたします。

山咲 よろしくお願いたします。広島市立大学の山咲と申します。本日はお招きいただきましてありがとうございます。

本日お話しさせていただく内容についてですが、今回の共通テーマは「仏教系大学における質保証を深化させる学生参画活動とは」ということで、質保証に係る学生参画の活動について、ご紹介させていただければと思っております。

本学の取り組みについては、進研アドの『Between』で、2023年度に認証評価を受審した際に長所として取り上げていただきまして、大学基準協会さまの事例報告会でも、この内容についてはお話をさせていただいております。ですので、すでにご存じの方もおられるかと思いますが、重複するような内容があるといったところは、ご了解いただければと思います。

これに加えて、実際に取り組んでいる具体的な話も含めて、本日はお話をさせていただければと思います。どうぞよろしくお願いたします。

本日の構成ですが、簡単に自己紹介等をさせていただきます。その上で、昨日の関西大学の山田剛史先生のお話と若干重複するところがございますが、学生参画型の質保証がなぜ求められてきているのかについて、少し背景的なところを、山田先生の

視点とはちょっとずらしてお話をさせていただければと思います。

その上で、本学でなぜこうしたカリキュラム・コンサルティングを導入してきたのか、その背景についてもお話しさせていただいて、具体的な内容についてご紹介をさせていただければと思います。

まず自己紹介ですが、私の略歴等につきまして、母校の関西大学を卒業後、そのまま大学職員を9年間勤めてまいりました。その中で、大学基準協会に事務局として出向をさせていただいて、実際に受審する側も関西大学の中で経験をして、今の大学に2019年から着任し、IRや質保証といったところを中心に業務として担当しております。

本日の事例報告の目的として挙げさせていただいているのは、学生参画型の質保証がなぜ求められてきているのか、これを皆さま方に少しでもご理解いただくような機会にできればと思っております。また、具体的な事例を通じて、それぞれの大学において、実はすでにやられているような事例や、この取り組みは、ちょっと変えればできるのではないかと、というようなところがあると思っておりますので、皆さまの



広島市立大学 教育基盤センター 山咲博昭 講師

ご所属の大学における学生参画型の質保証のあり方を考えるようなきっかけに少しでもなればと考えております。

まず、学生参画型の質保証がなぜ求められてきているのか、この点についてお話をしたいと思います。ポイントは2点あると私自身は理解をしております。1つ目は、昨日の山田先生の話でもあったかと思いますが、学修者本位の教育の実現を目指し、2000年代以降、文部科学省の政策、また、教育に関しては、2018年のグランドデザイン答申を中心にしながら、高等教育政策の中で学修者本位の教育の実現が求められるようになってまいりました。

これに加えまして、学修者視点での意見聴取や、学生視点での改善策の検討を通じて補正を行うということを挙げています。この補正、どういう意味なのかといったところも含めて、後ほどご紹介したいと思います。

まず1つ目、学修者本位の教育の実現につなげるというような観点についてですが、もともと戦後間もなくのころは、進学率もそれほど高くなく、大学は一部の層の学生が入ってくるというところがございました。そのため、かなり選抜されて、学力や能力の高い学生が入ってきたというところがございました。

ただ、大学自体がどんどん大衆化していくにあたり、進学率も上昇し、また、高等教育機関も量的に拡大してきたところがございます。ですので、今までエリート型というかたちで、15%未満の進学率の時代の教授方法を行ってきたところがございます。入ってきている学生が多様化してきているという観点から、そもそも今までの教授方法でいいのか、また、学生がその中で何ができるようになったのか、どういったところが問題になっているのか。これを把握しないまま授業や教育を展開していると、学生のニーズや実態と乖離するようなアプローチになってしまって、学生が思うように伸びていないのではないかということから、高等教育政策の中でも、学生をよく見て、カリキュラムや授業方法を見直ししていく必要があるという問題意識のもと、学修者本位の教育が求められるようになりました。

特に進学率が低かった時代については、先生方が教えたことを教える「教授パラダイム」といわれているところが中心でしたが、学生が多様化してきている今の状況も踏まえて、学生視点で、学生が何を学び、また、4年間の大学生活を通じて何を身に付けたのかという観点から教育をしていくことが求められるようになってまいりました。

これに加えて、グランドデザイン答申や、2020年に出ました教学マネジメント指針の中では、学修者本位の教育に加えて、それぞれの大学や学部学科でディプロマポリシーの学修目標を掲げております

が、この学修目標を、一人の教員が学生さんの視点に立って教育するだけでは、到底たどり着かないところがあります。学科学部の教育は、一人ではなく、そこにおられる先生方がチームとなって実施をしているというところがございます。そのため、チームとなって掲げている学修目標に向かって、プログラムを運営し、実施していくといった学習システムパラダイムの観点が、今求められるようになってまいりました。

こうしたところは、先ほど来お伝えしておりますとおり、学修者本位の教育という観点で、これを実現していくために、特に学生視点で、ニーズや実態と乖離のないアプローチで教育を実施するというのが、高等教育政策の中でも取り組まれているところ です。

これに加えて、学修者視点での意見聴取、改善策の検討を通じた補正が必要だといったところを書かせていただいています。

これについては、私自身も2010年に学部生としての学生を卒業してから、もう14年たっております。そのころの学生としての視点で、学生としてこうしたところが大事だったなとか、こうしたところに乖離があったなというのは今も覚えていますし、実際に意識としても残ってはいますが、時代の移り変わりや流れというところが急速に進んでいるところがございます。

ですので、学生の実態として、我々が学生時代に思ったことが、今の学生にとっての問題意識として乖離している部分がある。だから、教員や職員の立場になって、学生のことを振り返って考えてみても、どうしてもその乖離が何かしら生じるころがあります。なので、今、教育を受けている学生ないしは4年間の教育を受けて実際に全体を通して感じた学生の生の声をすくいながら、教員・職員の立場でカリキュラムや教育の内容、大学運営の取り組み等を変えていく際に、学生の視点も交えて取り組み内容の補正をしていかないと、実態との乖離が生じてしまうということを挙げさせていただいております。そうした観点で、学生参画型の質保証が、それに資するのではないかとこのところを挙げさせていただいております。

背景的なところで言いますと、山田先生の昨日のお話の中でも、欧米諸国の取り組みの流れの中で、こうしたところが求められているというお話があったかと思いますが、イギリスの質保証におきまして、日本同様、それぞれ内部質保証を実施しております。そうした中で学生の意見を必ず取り入れていくと。また、認証評価の中でも学生の声を取り入れるといったところを、制度・仕組みとして確立しているところがございます。

特にわが国の認証評価機関、大学基準協会が先陣

を切って第4期の認証評価を来年度から実施してまいります。大学基準協会はイギリスの質保証の取り組みを大きく参考にしていただいております。イギリスの取り組みも交えつつ、それぞれの大学の自主的・自立的な取り組みである内部質保証の中でも、学生参画型の質保証をしていくような促しをしているという背景が、政策的な流れとして1つあるかと思っております。

第4期の認証評価が来年度から始まりますが、大学基準協会におきましては、学修成果を軸に据えた内部質保証の重視と、その実質性を問う評価といったところに、特に軸足を置きながら取り組みを進めております。その中でもやはり学修者本位の教育というところで、学生が成長しているのか、学修目標にたどり着くような学生が育っているのかといった観点から質保証をしていくように進んでいるところがございます。ですので、こうした高等教育政策や認証評価の観点からも、学生参画型の質保証が求められているというところがございます。

私もいくつかの大学にヒアリングをさせていただきまして、学生参画型の質保証や教学マネジメントの取り組みを進めるにあたって、私案として、学修者本位の教育に転換していくために、重要な3つのポイントがあるのではないかと整理しています。

1つ目がDPの学修目標の到達に向けて順次性、体系性のあるカリキュラムの中で、組織的な教育に取り組んでいること。2つ目が、学修成果をそれぞれ把握して、学生の実態を把握して、学生が実際、どこまで伸びているのか、自分自身が気付くようなきっかけを設けていること。3つ目が、学修者視点を設けて、そこを踏まえてカリキュラムや取り組みの補正をしていること。こうした取り組みをしている大学こそが、徐々に学修者本位の教育への転換につながっているのではないかとこのフェーズで整理をさせていただいております。

こうした取り組みが求められていく中で、わが国におきましては、大学全体の質保証や学生参画、カリキュラムに対する質保証に対する学生参画や授業レベルの参画といったところが、それぞれのレベルにおいて昨日も事例紹介があったかと思っております。

例として挙げているのが、大学運営全体で言いますと、東北大学が「学生評議員制度」により、大学運営そのものに対して直接意見を言うような場を設けていたり、筑波大学が学生の評価委員を学内で委嘱し、学科や専攻、学位プログラム単位で、カリキュラムに対する意見を聴取・評価するような機会を設けていたりする取り組みがございます。

本学のカリキュラム・コンサルティングの取り組みにつきましては、カリキュラムレベルの話に対して、学生から評価や助言をいただくような機会にも

なっております。個別の授業の話についても、学生の意見から出てくるところがありますので、カリキュラムレベルと授業、両者の観点で、意見聴取や助言をいただくような位置づけになっております。

京都文教大学の先ほどの事例報告で挙がっている観点で言いますと、マクロもミドルもミクロも幅広く取り組まれています。中期計画のところはマクロに当たりますし、ミドルのところは学生参画型のカリキュラムアセスメントが入ってきますし、ミクロのところは個別の授業でも、こうした取り組みをなされているというところがありますので、全ての取り組みが網羅されているという、とても特徴的な取り組みなのかなというふうには先ほど話をお伺いしておりました。

こうした中で、ここからは本学のミドル、ミクロの取り組みについてお話をさせていただければと思います。

先ほどご紹介しましたように、本学の取り組みは進研アドの『Between』のほうでも取材をされ、ご紹介させていただいているのと同時に、今年の6月19日にありました大学基準協会の事例報告の中でも報告させていただいておりますので、もしこちらのほうを聞かれている方、また、見られている方については、重複するようないところがあるかと思いますが、この点、ご容赦いただければと思います。

本学の簡単なお話をさせていただきたいと思っております。広島市立大学は、1994年に開学しました。今年がちょうど開学30周年ということになっております。

本学の学部構成は少し特徴的なのですが、国際学部、情報科学部、芸術学部と、人文社会系と自然科学系、また、芸術というような、多岐にわたる、特色のある学部構成になっております。こうした3学部に加えて、広島にある大学ということで、特に世界平和にも貢献するような国際的な大学というところを建学の基本理念に掲げておりますので、2019年から平和学研究科といった研究科も設けつつ、この基本理念の実現に向けて取り組んでいる大学になっております。

こうした3学部4研究科の構成で、学生数は、大学院生を合わせまして2,000名程度の、小規模の大学になっております。

本学のカリキュラム・コンサルティングや質保証の取り組みについては、全学の組織の中で言いますと、学長や副学長、各学部研究科の部局長の先生方が入っております「内部質保証委員会」で全体の方針を設計しまして、カリキュラム・コンサルティングや、本日も紹介はしませんが、DPの到達度やカリキュラムに対する評価を行っています、カリキュラムアセスメントといったカリキュラムの自己評価、また、そのアセスメントをした内容に対する

他学科の教員からの評価を含めまして、内部質保証委員会のもとに置かれています専門委員会、今年から「教育質保障委員会」という名称に変更しているのですが、こちらの中で取り組みについて設計を考えております。

ここについては、われわれのような教育基盤センターの教員に加えまして、各学部研究科の副部長局長級の先生方に、副学部長や、各学部の中に内部質保証委員会がございますので、そちらの委員長の先生に入っただき、取り組みについて、毎年度、見直し、検討を行っております。

こうしたカリキュラム・コンサルティングの大学の取り組みにつきましては、2019年度に私が着任しまして、学生の実態を把握していくために、全学的な学生調査の設計、実施をしてまいりました。

ただ、どうしても、その後に背景として書いているのですが、量的な部分で見えるところ、学生のカリキュラムレベルでどう思っているのかということも含めて、自由記述で書いてきてくれる学生もおられるので、その中で把握できることはありますが、やはりそれはごく一部の声にしかなりませんでした。ですので、本学は2,000名程度の小規模の大学になりますし、1学年で言いますと430名程度の学生さんで構成されておりますので、できる限り生の声を拾うような機会や場を設けられないかと考えまして、2020年度から、学生の生の声を拾うようなカリキュラム・コンサルティングの導入を決定し、2020年度以降、こうした取り組みを継続的に実施しております。ですので、今年で5年目に当たる取り組みということになります。

実施した背景については、先ほどお話しさせていただいたとおりですが、やはり教員、職員目線では、学生調査の自由記述も含めて、気付けないようなことや、はっとさせられるような記述がなされていることがございました。こうしたあまり表立っていない、顕在化していないような学生の実態や抱えている問題を含めて、学生の生の声を拾うような機会が必要だと考え、こうした取り組みを実施しているところになります。

実施の目的としましては、冒頭でご説明した学修者本位の教育の実現もそうですが、やはり実施している教育や取り組みが、学生の思っているところや実態と、教職員が思う市大生の実態と乖離しているといったところを少しでも縮めて、いいアプローチになるようにしていければというような観点から実施することを目的にして、取り組んでいるところがございます。

こうしたカリキュラム・コンサルティングの取り組みにつきましては、教学マネジメント指針で5つの項目がございますが、そのひとつの学修成果・教育成果の把握・可視化というような観点につながっ

てくる取り組みとなっております。

本学の中では、このカリキュラム・コンサルティングだけではなく、カリキュラムに直接的に、それぞれのDPの到達度、どれくらい達成できているのかを、毎年度、教育課程編成実施者による自己評価を行っております。また、それに対する他者評価に加えて、教員、職員の観点での評価だけではなく、学生による評価も取り入れながら、翌年度以降のカリキュラム改善につなげていくというような三本柱をもって、質保証の取り組みを進めております。

本学の質保証の全体像につきまして、三つの方針(P)、教育課程(D)の部分は他大学と同じような取り組みとなっております。学修成果の把握・可視化(C)の部分としては、本学の場合、3学部とも卒業段階で成果物を求めていますので、卒業論文、卒業研究、卒業制作に対するルーブリック評価と、学生調査でDPに対してどこまで到達しているのか、学生に対しての自己評価、これを共通の項目として実施するほか、各学科の中での指標を別途設定し、学修成果の把握・可視化を行っています。ここで集めたデータをカリキュラムアセスメントで自己評価をし、他者評価にも活用します。その中で学生評価を実施するというような位置づけで、取り組みを進めております。

実施の時期としましては、11月から翌3月にかけて評価を実施しております。このカリキュラム・コンサルティングについては、卒業予定者である4年生に対して実施しておりますので、11月から1月といった卒業制作や卒業論文に取り組まれているタイミングで、どういうふうに感じられたのか、思ったのかという観点から、学生向けのインタビューを実施しております。

事前準備の流れとしましては、9月下旬から10月上旬にかけて日程調整、実施依頼をしております。

実施するにあたってポイントになっているのが、インタビュアーとして各学科から教員1名を選出いただくのですが、自分の所属する学科のカリキュラム・コンサルティングには原則参加しないということです。ほかの学科の教員がそれぞれのコンサルティングの進行をするという位置づけにしております。

これは、自分の学科の教員がいると、学生がどうしてもその先生の授業を受けて思ったところも含めて、その場で発言するということがあるので、誰が話しているのかといったところも見えてしまい、学生が話しづらいことがあります。学生が話しやすい環境づくりという観点で、他学科の教員がカリキュラム・コンサルティングの進行をするという位置づけにしております。

当日の物品としては、卒業予定者のカリキュラム表やシラバス、また、学生にはまず個別に意見を書

いてもらいます。また、カリキュラム・科目群ごとに付箋を貼っていきますので、大きな模造紙を準備してやっております。

基本的には各学科・専攻の全学生に呼びかけをして、だいたい卒業予定者の25%から50%程度の範囲で選出してくださいというお願いをしております。ですので、できる限り多くの学生が参加できるようなタイミングで場をセッティングし、運営をしているというところがございます。

当日は、4名から6名のグループに分かれて、よかった点・改善したほうがよい点といったところを個人でプレストをして、グループで集約をしていきます。これは、だいたい60分程度で実施しております。

この際にポイントになっているところが、こうした取り組みやアンケートの意見をもとに改善をしようとする、それは声の大きい学生の意見じゃないかと言われることがあります。それを少しでも抑えるために、個別の学生に個人ワークとして、カリキュラムのよかった点や改善したほうがよい点を出してもらいます。これに加え、グループでも、出してもらった意見に対して、自分もその授業を受けていて、その意見に賛同できる人はどれだけいますかという問いかけをして、それをグループごとに1つの意見ごとに集計し、できる限り、量的にも、その意見に対する賛同度合いが高いのかどうか集計するようにしております。

これに加えて、こうした個別のカリキュラムの話や業科目の話になってくると、どうしても教員に対する誹謗中傷といった意見も出てくる恐れがありますので、冒頭で誹謗中傷になるようなコメントは避けて、中身のどこが問題になっているのかについて意見を出してくださいとアナウンスをさせていただいております。

また、出してもらった問題点や改善したほうがよい点については、なぜそう思うのか、学生の視点での簡単な理由と、もし自分が授業をする側・カリキュラムを組む側だったら、自分なりにどういうふうに改善をしていくのか、改善方法についても検討をしていただいております。

こうした観点から、カリキュラムのコンサルティングというところで、評価もしていただきますし、助言もしていただくという観点で、こうした名称を付けて実施をしているというところになります。

実際に使っている説明資料では、例示も示しつつ、1枚の付箋について1つ意見を書くというところと、質問項目は科目群ごとに置いておりますので、科目群ごとにだいたい3枚程度書くようにしてくださいということをお願いしております。また、よかった点についてはその理由を、改善したほうがよい点については、皆さんなりの解決策も書いてください

とお願いをしております。

グループに入って、何も付箋がないままだと発言できない学生もおられるので、まず個人で作業をしてもらって、その上でグループとして個々の意見を含めて出していただくというような取り組みをしております。

グループで話す際には、付箋の内容で出てきた意見について賛同できるかどうか、同意できるかどうかを右下に記入し、グループ5人のうち3人が賛同できるという場合であれば「5分の3」というように書いて、集計してもらいます。

それぞれ4名から5名のグループに分かれて付箋での書き出し等をしていただいて、そのあとグループで話をする機会を設けます。その後、担当の教員が、各グループで集計した付箋を拾い上げて、科目群ごとに貼っていくことをやっていただきます。青い付箋と赤い付箋に分けて、色合いも含め、分かりやすく整理をしております。

その後、カリキュラム・コンサルティング集計表というものを用意しておりますので、この様式の中で、よかった点、改善すべき点が、どの科目群に当たるのかを整理します。カリキュラムのほか、大学生活についてもこちらで把握できていない観点もありますので、同様に意見を出していただいております。学生の改善案が出ていればこちらに記入し、それぞれ集計した中で同意数がどれくらいあるのかというのも含めて、各学科で集計をしていただいて、終了後1週間を目安に提出をいただきます。

カリキュラム・コンサルティングで実施した内容を、翌年以降のカリキュラムの改善や授業改善に役立てるということになりませんが、これに加え、11月から1月にかけて実施することから、当該年度に自己評価・他者評価していく中で、各学科からプレゼンテーションしていただいております。そういったプレゼンテーションの中にも、生の声として出ている部分も含めて、どう次年度以降の改善につなげていくのか。こうした、教員、職員で評価した内容について、学生の意見も交えつつ、評価内容の妥当性を担保したり、内容の補正をしたりといった取り組みを実施しております。

改善のプロセスとしては、カリキュラムを変える必要がないもの、授業科目を再編する必要がないものについては、短期的に対応いただいたり、早めに取り組みべきものについては、中期的に学則改正の対応をして一部の見直しをしたりします。また、すぐには対応しなくてもよいが、カリキュラム改定をしていくときの材料にしようというところは、長期的な再編に役立てるといような位置づけにしております。

具体的な改善事例としまして、教員にとって、自分が担当しない科目については、シラバス等では具

体的に何を扱っているのか分からないことから、授業内容の重複が起きることがあります。カリキュラム・コンサルティングの中で、学生から、このAという科目とBという科目、内容が同じですよというような指摘をいただくことがありました。重複する内容については、2人の教員が扱うくらいであれば、とても重要な内容ではないかと考え、この内容は必修科目として位置づけるとか、必修科目の中に盛り込もうというような検討に役立てたりしました。また、英語等で習熟度別のクラスを設けることで、学生さんの学力差に対応できるのではないかと検討もありました。

一部の学部・学科については、新しいカリキュラムを走らせている中で、学生がどういうふうになっているのか、毎年度、学年進行に伴ってヒアリング・コンサルティングを実施し、翌年度以降の授業改善にもつなげているところもございます。

ここまで本学のカリキュラム・コンサルティングの取り組みについてご紹介をさせていただきました。学修者本位の教育がなぜ求められているのか、学生参画型の質保証がなぜ求められているのかという観点についてもお話をさせていただきました。教員、職員も大学の構成員ですが、学生も大学の構成員です。こうした構成員である学生の具体的な声をすくう機会を設けることによって、学修者の視点を大学運営や教育改善に取り込んでいくという観点を持ちながら、取り組みを進めております。

これにより、大学の発展や、学生自身が4年間の学び自体を振り返るような機会にもなっておりますので、こうした学生参画型の質保証については、大学にとっても学生にとってもよい機会になっていると思います。

少し長くなりましたが、広島市立大学のカリキュラム・コンサルティングの事例について、報告をさせていただきました。ご清聴いただきましてありがとうございます。

■質疑応答

司会 山咲先生、ありがとうございます。それではせっかくなので、フロアのほうからご質問を受けたいと思います。ご質問がある方は、挙手をお願いいたします。

岐阜聖徳学園大学 岐阜聖徳学園大学短期大学部 観山 正見 学長

カリキュラム・コンサルティング、非常に素晴らしい試みだと思います。最後のところですが、具体的なカリキュラムに対して、学生からこう改善したらいいのではないかと意見が出てきた場合に、個別の教員、個別のスタッフにどのように伝えるの

でしょうか。

教員には教員の、ある種のポリシーみたいなものがあって、そこがなかなか難しいところであると思いますが。

山咲 ご質問いただきましてありがとうございます。その点については一番難しいなと思いながら取り組んでいるところではございますが、特に学生の意見として、英語教育等について、必修科目なので、コメントをいただきやすいところがあります。

そうなったときに、先生方にも学生の意見として出ていますよということはお伝えするのですが、ポリシーや、教育の狙いとしてこうしたところがあるという思いを持たれている先生もおられます。ですので、そういったところは逆に学生に伝わっていないので、その点をしっかり伝えていただいて、ただ、教育方法のところは、ちゃんと狙いがあるやられているのであれば、そこはギャップとして生じるのは仕方ないですよというふうにお伝えするようにしております。

観山 個別の教育スタッフには、アセスメントの結果をどのようにお伝えしておられますでしょうか。事務職や教員を仲介するのか、学長が関与しているのか、その点を具体的に教えていただきたいです。

山咲 各学部・学科の中であれば、内部質保証委員会ないしは教務委員会がカリキュラムについて担っているところがございますので、その中で、評価結果を検討材料として考えていただきます。どうしても声が強くなるとか、多く出ているものについては、先生方の判断をもって担当教員に伝えるということにさせていただいております。

司会 ありがとうございます。それではこれで事例報告Ⅱを終了させていただきたいと思います。あらためまして山咲先生に盛大な拍手をよろしく願います。